

『源氏物語』 朧月夜との再会の場面考

一平中説話の投影の問題をめぐって一

金 秀 美 *

(e-mail : soomikim7@hanmail.net)

目次

1. 問題の所在
 2. 末摘花巻における平中物語
 3. 若菜上巻における平中物語
 4. 若菜上巻における平中引用の意味
 5. 結をかえて一朧月夜再登場の意味
-

1. はじめに

若菜上巻は、朱雀院の出家、源氏の四十の賀、女三宮の降嫁という主な事件が相次いで描かれており、『源氏物語』において転換点とも言われる巻である。このような物語の中で、ごく短い分量ではあるものの、源氏と朧月夜との15年ぶりの逢瀬のことが印象深く描かれている。

- 【1】夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少ない宮の内のありさまも、さも移りゆく世かなと思しつづくるに、(a) 平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。昔に変わておとなおとなしくは聞こえたまふものから、これをかくてやと引き動かしたまふ。
(若菜上巻八〇～八一頁) 1)

* 高麗大学校 日語日文学科 助教授。日本古典文学。

"This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government(MOEHRD)" (KRF-2007-362-A00019)

1) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注(1994～1998)『新編日本古典文学全集 源氏物語』小学館。以下、『源氏物語』の本文引用は、本書による。

この再会の場面【1】を見ると、傍線部(a)「平中のまねならねど、まことに涙もろになむ」のように、源氏の行動に平中のことが引き合いに出されていることが注目される。『源氏物語』の中で平中のことが言及されているのは、当該場面と末摘花巻で源氏と若紫が戯れる場面、二カ所のみである。

まず、末摘花巻の平中引用においては、多くの古注釈が平中説話の墨黒滑稽譚を典拠として挙げており、それは現代の諸注釈にも定説として受け入れられてきた。さらに、鈴木宏昌氏は「末摘花巻が平中を主人公とする『をこ物語』を意識しつつ構築された巻であること」を明らかにし、末摘花巻における平中説話が単に一場面の引用ではなく、巻全体の構想や構造に関わっていることを究明している²⁾。

それに比べて、若菜上巻における源氏と平中の関連づけについては、多くの古注釈と現代の注釈が、末摘花巻の部分と同一の平中説話(墨黒滑稽譚)を下敷にするものとして取り上げているのみで、典拠探しやその物語の意味合いについて具体的論じられてこなかった。当時平中に関する説話は、『平中物語』『大和物語』『十訓抄』『世継物語』『宇治拾遺物語』『古本説話集』など数多い作品に収録されており、広く流布していたと推定される。とすると、この若菜上巻における平中の話を、末摘花巻の平中説話(墨黒滑稽譚)と同一ものと限定せず、若菜上巻により近い内容を探って検討する必要があるのではなかろうか。

本稿では、若菜上巻の源氏と朧月夜との逢瀬の場面に投影されている平中のことに焦点を当てて、今まで指摘してこなかった他の平中説話との影響関係を明きらかにしてみたい。さらに、その挿話が『源氏物語』の中でどのような位置づけにあり、いかなる意味を持つのかについて考察を進めていきたい。

2. 末摘花巻における平中説話

では、若菜上巻の場面を考察する前に、まず末摘花巻に投影されている平中説話を検討することとする。それは、末摘花との逸話が一旦終えた巻末のところに、二条院で源氏が若紫とゆったりと時間を過ごす場面に出てくる。

【2】(源氏)「さらにこそ白まね。用なきすさびわざなりや。内裏にいかのたまはむとすらむ」といともめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて拭ひたまへば、(源氏)

2) 鈴木宏昌 (1984) 「末摘花巻における光源氏像の形成—『みつ』問答との関連を軸に一」『文学・語学』、pp.88-97. ——— (2002・1) 「源氏物語と平中説話—末摘花巻の構想と主題—」『帝京大学文学部紀要 日本アジア言語文化』

「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。(末摘花巻三〇六頁)

先述したように、従来この場面における平中の引用については、『源氏積』が平中黒墨滑稽譚を典拠として挙げて以来、『奥入』『紫明抄』『異本紫明抄』『河海抄』などに受け継げられ、定説として認められてきた。

『源氏積』(前田育徳会尊経閣文庫蔵「源氏物語積」) 3)

平中みる女ことになくけしきを見せんとすゝりかめにみつをいれてくしてめをぬらしけるを①女こゝろえてそのかめにすみをすりていれたりけるをしらてれいのやうにしてかへりけるをみて女われにこそつらさを君かみすれとも人にすみつくかほのけしきは

『紫明抄』 4)

平仲委哥

我にこそつらさは君か見すれとも人にすみつくかほのけしきよ

『異本紫明抄』 5)

へいちうか見る女ことになくけしきを見せんとすゝりかめに水をふところに入れてめをぬらしけるを女心えてそのかめにすみをすり入たりけるをしらてれいのやうにして返たりけるを見て女我にこそつらさを君か見すれとも人にすみつくかほのけしきよ 伊行
くれなるの色つく花とみしかとも人をあくにはうつろひにけり

『河海抄』 6)

②宇治大納言物語云平仲定文は女のもとにゆきてなくまねをして硯の水をふところにもちて目をなむぬらしけるを女心えて墨をすりて入たりけるをしらて又ぬらしければ女かゝみをみせてよめる

か[不木]

我にこそつらさは君かみすれとも人にすみつくかほのけしきよ

③大和物語にも此事あり

これらの古注釈が引用として挙げている平中黒墨滑稽譚を見てみると、平中が女の気を

3) 渋谷栄一編(2000)『源氏物語古注集成第16巻 源氏積』おうふう。

4) 『紫明抄』の本文は「御すゝりのかめの水にみちのくにかみをぬらしてのこひ給へいちうかやうにいろとりくはへ給なあかゝ覧はあえなんとたはふれ給さまいとおかしいもせと見え給へり」となっており、傍線部のように、平中黒墨滑稽譚の内容がそのまま本文に入っている。玉上琢弥編(1968)『紫明抄 河海抄』角川書店、p.48

5) (1978)『源氏物語古注釈大成』第七巻、誠進社、p.23

6) 玉上琢弥編(1968)『紫明抄 河海抄』角川書店、pp.269-270

引くため、硯の水入れを目につけて空泣きをしたが、それに気づいた妻が水入れに墨を入れ、それを使った平中の顔が真っ黒になった、というほぼ同じ内容の話が載せられている⁷⁾。

もちろんこれらの内容は、萩谷朴氏の指摘通り「源氏物語に関する考証として、平中黒塗譚を引用したのに過ぎない」⁸⁾、それを直接平中好色滑稽譚の原型や展開と結び付けて見るわけにはいかない。元々この平中黒塗滑稽譚は「出自甚だ明らかならざる譚」⁹⁾であった。『河海抄』と『異本紫明抄』がこの話の所収本として指摘する^②『宇治大納言物語』は、宇治大納言源隆国が編纂したと伝えられているが、現存せず、その実体を知ることができない。『河海抄』では^③「大和物語にも此事あり」と書いてあるが、現存本『大和物語』に見られず、さらに『平中物語』にもこの話は収録されていない。現在この平中黒墨滑稽譚は、平安末期から鎌倉初期に成立と推定される『古本説話集』にまとまった内容として収録されている。

『古本説話集』 十九 平中事

…〔前略〕…この平中、さしも心入らぬ女の許にても、泣かれぬ音を、空泣きをし、涙に濡らさむ料に、硯瓶に水を入れて、緒をつけて、肘に懸けてし歩きつ、顔袖を濡らしけり。出居の方を妻、のぞきて見れば、間木に物をさし置きけるを、出でてのち、取り下して見れば硯瓶也。また、晷神に丁子入れたり。瓶の水をいうて、墨を濃くすりて入れつ。鼠の物をとり集めて、丁子に入れ替へつ。さてもとの様に置きつ。例の事なれば、夕ざりは出でぬ。暁に帰て、心地悪しげにて、唾を吐き、臥したり。「晷紙の物の故なめり」と妻は聞き臥したり。夜明けて見れば、袖に墨ゆゝしげにつきたり。鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり。硯瓶を見れば、墨をすりて入れたり。晷紙に鼠の物入りたり。いと／＼あさましく心憂くて、そののち空泣きの涙、丁子含む事、止めてけるとぞ。 (『古本説話集』四二四頁)¹⁰⁾

上記の『古本説話集』第十九では、前半の後妻打ち説話と後半の黒墨譚で構成されているが、後半の場合も黒墨譚の他に、晷紙に忍ばせて丁子を鼠の糞と入れ替える話が後ろに添加されている。また墨をすり入れる主体や和歌の省略など、古注釈の内容とや

7) 『源氏釈』の「吉川家本<源氏物語>勘物」では、①「女」が「妻」となっており、『古本説話集』も墨を入れたのは「妻」になっている。また、『紫明抄』の場合、「われに」の歌のうしろに「平仲妻歌」と明記している。このようにこの説話では、男が通う女と妻とを分けて設定する本文と同一女とみる本文、両方存在しているのである。

8) 萩谷朴 (1959) 『平中全講』同朋社、pp.244.

9) 萩谷朴 (1959) 前掲書、pp.244.

10) 三木紀人外 校注 (1990) 『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語・古本説話集』岩波書店

や異なっている。その点に関して、萩谷朴氏は「古本説話集所収の平中黒塗り譚は、源氏物語が引用した古伝承の平中墨塗り譚ではなく、奥入以下が考証に用いたものとも違う後世の偽作に過ぎない」と断言する¹¹⁾。即ち、『源氏物語』の当時通行していた平中黒墨滑稽譚の正確な内容を現在残っている文献から確認することはできないが、平中が女の歡心をかうため空泣きをしたが、それがばれて恥をかいたという話の骨格は、『古本説話集』と『源氏物語』の諸注釈とも一致していると言える。では、本文【2】に戻って、その場面を詳しく検討してみよう。

【3】 絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我も描き添へたまふ。(a) 髪いと長き女を描きたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、絵に描きても見まうきましたり。(b) わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの赤花を描きつけにほはしてみたまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。(c) 姫君見て、いみじく笑ひたまふ。(源氏) (d) 「まろが、かくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、(紫)「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやふく思ひたまへり。それ拭ひをして、(源氏)「さらにこそ白まね。用なきすさびわぎなりや。内裏にいかのたまはむとすらむ」といとまめやかにのたまふを、いといとほしと思ひて、寄りて拭ひたまへば、(e) 「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。(末摘花卷三〇五～三〇六頁)

ここで源氏は傍線部 (a) のように、末摘花を思わせる髪の長い女を描き、その女の鼻に紅を付けると同時に、(b) 自分自身の顔にも紅を塗っている。このような源氏の行為は、(c) 「姫君見て、いみじく笑ひたまふ」のように、若紫を笑わせるものであった。さらに、源氏は、(d) 「このままの顔になってしまったら、どうでしょう」と言い、それを拭いても白くならないふりをして幼い若紫を驚かせる。心配になった若紫がそれを拭こうとすると、源氏は、傍線部 (e) 「平中のように、色を塗り加えないでください。(黒いものより) 赤いのなら、我慢できるでしょう」と、鼻に紅を塗って赤くなった自分の姿に、顔が黒くなった平中のことを重ねているのである。

この巻における平中黒墨滑稽譚は、源氏の顔に塗られた赤い色と平中の顔に付けられた黒とが明確に比較されながら描かれることによって、源氏の造型や物語の文脈に深くかかわっているのである。即ち、ここでの源氏の一連の行動、源氏が末摘花みたいな女性を描き紅をつけることや、みずから自分の顔に紅を塗り、その姿を平中にたとえるというのは、源氏が「末摘花を笑ひ者としていると同時に、自分自身も笑ひ者」として「平中の立場に自身を置いていること、笑うべきをこな人物として平中になぞらえている」¹²⁾ ことである。

11) 萩谷朴 (1959) 前掲書、pp.244-246

このように、源氏と末摘花との逸話が一段落するこの場面で、平中の「主人公のをこなる失敗譚」が持ち出され、源氏の滑稽的な失敗の話として括られていくのである。

3. 若菜上巻における平中説話

では、『源氏物語』の中で平中のことが引用されている、もう一つの場面を検討してみたい。本文【4】は、先引用した若菜上巻の本文【1】の直前の記述である。

【4】宵過ぐして、睦まじき人のかぎり、四五人ばかり、網代車の昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ。和泉守して御消息聞こえたまふ。かく渡りおはしましたるよし、ささめき聞こゆれば、驚きたまひて、(尚侍) (a) 「あやしく。いかやうに聞えたるにか」とむつかりたまへど、(中納言の君) 「をかしやかにて帰したてまつらむに、いと便なうはべらむ」とて、(b) あながちに思ひめぐらして入れたてまつる。御とぶらひなど聞こえたまひて、(源氏) (c) 「ただこもとに。物越しにても。さらに昔のあるまじき心などは、残らずなりにけるを」とわりなく聞こえたまへば、(d) いたく嘆く嘆くるざり出でたまへり。さればよ、なほけ近きは、とかつ思さる。かたみにおぼろけならぬ御みじろきなれば、あはれを少なからず。東の対なりけり。(e)辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて、御障子のしりは固めたれば、(源氏) (f) 「いと若やかなる心地もするかな。年月の積もりをも、まぎれなく数へらるる心ならひに、かくおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」と恨みきこえたまふ。

夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少なき宮の内のありさまも、さも移りゆく世かなと思しつづくるに、(g) 平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。昔に変わておとなおとなしくは聞こえたまふものから、これをかくてやと引き動かしたまふ。(若菜上巻八〇～八一頁)

本文【4】は、源氏が朧月夜がいる二条宮家を訪ね、彼女と再会する場面である。若菜上巻になると、女三宮の降嫁により紫上を中心とした六条院の秩序は崩れはじめ、女三宮と紫上との板挟みの状態から逃がれるかのように、源氏は朧月夜との密会を敢行する。

ここで源氏は、朧月夜の訪問の前に、和泉守と中納言の君を通して自分の来意を朧月夜に告げさせる。(a) 朧月夜は断るよと言ったが、それは伝わらず、さらに和泉守と中納言の君は (b) 無理に工夫をして源氏を朧月夜の部屋の前にある廂に入れてしまう。源氏は朧月夜が黙認したと分かっていたのだろうか、さらに(c)彼女に几帳越しで対面したいと訴えるのである。その自分の誘いに応じて (d) 朧月夜が奥の方から自分の方へ出てくる

12) 注(2) 鈴木宏昌(1984) 前掲論文、p.95

と、源氏は朧月夜が承諾をしたと誤認してしまうのである。

しかし、朧月夜の居所に入ろうとすると、(e)のように、そこは掛け金によって施錠されているのであった。それによって、彼女の拒絶を察知した源氏は、(f) 若い男女の出会いのようだと非難し、「このように知らぬふりのおもてなしは、ひどくつらい」と恨みを言い、そして(g) 「平中のまねではないが、ほんとうに涙もろくなってしまった」と、平中のことを引き合いに出す。

前述したように、この若菜上巻の【1】傍線部(g) 「平中がまねならねど」の典拠としては、末摘花巻と同じ平中黒墨滑稽譚が指摘されてきた¹³⁾。

しかし、この若菜上巻では、末摘花巻のように、顔に付けられた黒と赤の色が主眼点になっておらず、『弄花抄』が「そらなきなすとといへり」、『新全集』頭注が「平中が、女の気をひくため空泣きをしたこと」と指摘するように、ここでは、涙を流している源氏の姿に、女の歡心を買うため空泣きをする平中のことを重ねており、「涙」がその共通項になっているのである。

このように平中が女との関わりの中で涙を流すというのは、実は墨黒滑稽譚のみならず、本院侍従樋洗筥譚にも出てくる設定である。とすると、当然両者の関わりをも検討する必要があるのではなかろうか。この説話は、墨黒滑稽譚と同様、その出典が未詳であるが、『今昔物語集』「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」、『宇治拾遺物語』卷第三「十八平貞文、本院侍従の事」、『世継物語』卷第九百五十一、『十訓抄』一卷二十九など、『源氏物語』以後の作品に収録されている。以下、本院侍従樋洗筥譚を取り上げて、若菜上巻の当該部分の比較検討してみたい。

【5】『今昔物語集』 「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」

①本院ニ行テ局ノ前々云継女ノ童ヲ呼テ、「思ヒ侘テ此ナム參タル」ト云セタリケレバ、…〔中略〕…一時許有テ、皆人寢ヌル音為ル程ニ、内ヨリ人ノ音シテ来テ、遣戸ノ懸金ヲ竊ニ放。平中、喜サニ寄テ遣戸ヲ引ケバ、安ラカニ開ヌ。…〔中略〕…女ノ云フ様、「極キ物忘レヲコソシテケレ。隔ノ御〔障〕子ノ懸金ヲ不懸デ来ニケル。行テ、彼レ懸テ来ム」ト云ヘバ、平中、現ニト思テ、「然ハ、疾ク御マセ」ト云ヘバ、女起テ、上ニ着タル衣ヲバ脱置テ、単衣・袴許ヲ着テ行ヌ。

其ノ後、平〔中〕、装束ヲ解テ待臥タルニ、障子ノ懸金懸ル音ハ聞コエツルニ、今ハ来ムト思フニ、足音ノ奥様ニ聞エテ、来ル音モ不為テ良久ク成ヌレバ、怪サニ起テ、

②其ノ障子ノ許ニ行テ搜レバ、障子ノ懸金ハ有リ。引ケバ、彼方ヨリ懸テ入ニケル也ケリ。然レバ、③平中、云ハム方無ク妬ク思テ、立踊リ泣ヌベシ。物モ不思エテ障子ニ副

13) 『紫明抄』「平仲定文は女のもとにゆきてなくまねをして硯の水入をふところにもちて目をなんぬらしける」

『河海抄』「平仲(定)文 女ことに心ざしあるよしをみえんとて硯の瓶に水を入れてもちて目をぬらしてなくまねをしけるといへり 在末摘(花)巻」

立テルニ、何ニト無ク涙泛ル事雨ニ不劣ズ。「④此許入レテ謀ル事ハ、奇異シク妬キ事也。此ク知タラマシカバ、副テ行テコソ懸サスベカリケレ。我ガ心ヲ見ムト思テ、此ハシツル也ケリ。何ニ白墓無キ者ト思トスラム」ト思フニ、不会ヌマリモ妬ク悔シキ事、云ハム方無シ。(新大系本⑤三九四頁) 14)

【6】『宇治拾遺物語』 卷第三「十八平貞文、本院侍従の事」

(前略) なにやかやと、えもいはぬ事ども言ひ交して、疑ひなく思ふに、「(中略)」といへば、さる事と思ひて、かばかりうち解けにたれば心やすくて、衣をとどめて参らせぬ。まことに遺戸たつる音して、「こなたへ来らん」と待つ程に、音もせて奥さまへ入りぬ。それに心もとなくあさましく、現心も失せ果てて、這ひも入りぬべけれど、すべき方もなくて、やりつる悔しさを思へど、かひなければ、泣く泣く暁近く出でぬ。(140-141頁) 15)

【7】『世継物語』 卷第九百五十一

あしおとのおくさまにきこえてくる音もせず。ひさしう成ぬれは。あやしきにおきて。此しやうしの方をさくれは。あなたをかけていにける也けり。いはんかたなくおほえて。さうしにそひてたり。何ともなくて涙のみこほるゝ事。五月雨にをとらす。こはかうりに入てかくはかなことはいかてか有へきそ。いてこそくして行て。かけさすへかりけれ。我心みんとおもひてかくはしつる也。いかに我をはかなき物とおもふらん。あはぬよりねたき事かきりなし。おもひあまりておもふやう。さはれ夜あくるともかくてあらむ。さりとも人しきかしと。あやなくおもへども。あけて人くる音すれば、かくてあらんもそゝろかれていそき出ぬ。(百七十四頁) 16)

本院侍従樋洗筥譚は、平中好色滑稽譚の中で、最も幅が広く、最も長い生命をもって歴史的に展開し来たものである。萩谷氏は、この説話が「他のどの平中説話よりも、主人公としての平中の地位が終始安定している」と評価し、この説話の構成を次のように三段階として説明している¹⁷⁾。

本院侍従樋洗筥譚は、伊勢と貞文との「みつ」問答を中心とする和歌的小話から発展して、雨の夜忍んで行った平中が、外から鍵をかけられる第二段階の構想を附加し、更にその復讐というよりは諦めの為の手段として平中が侍従の君の樋洗しの筥を奪ったところ、その筥の中には薫香で作った「まり」がしかけられてあったという、第三段階の後日譚

14) 森正人校注(1996)『新日本古典文学大系 今昔物語集五』(岩波書店)

15) 三木紀人外 三人校注(1990)『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語・古本説話集』岩波書店

16) 槁保己一(1924・8)『続群書類従』第三十二輯下、続群書類従完成会、(巻第九百五十一、世継物語)

17) 萩谷朴(1959)前掲書、pp.247-250

を備えるに到って、平中好色滑稽譚として完成をみたわけである。

『今昔物語集』と『世継物語』とはこのような三段階の内容が全部収録されているが、『宇治拾遺物語』の場合、第一段階である「みつ」問答の話が欠落している。ただ今回考察の対象とする若菜上巻の平中のことは、この説話の第二段階の内容と関わっているものであり、その内容は上記の三書全部揃って収められている。ここでは、説話を筋だけを書き記し、教訓を主にした『十訓抄』を除き、上記の三つの書を中心に考察を行ってみたい。

本院侍従樋洗宮譚の第二段階の話は、平定文（通称、平中）が本院侍従に懸想をし、彼女の居所に忍んで侵入する場面から始まる。また『源氏物語』の本文【4】の場合も、源氏が普段思い続けた朧月夜がいる二条宮家を忍んで訪問していく場面から始まっているのである。

その次の平中説話の内容は『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『世継物語』各々表現の差はあるが、普通思いをかけていた女性の所に接近した男が、その女性が男の侵入を防御するため施錠した隔て具く『今昔』と『世継』は障子、『宇治』は遣戸の前で自分を拒絶したことに気づき、落胆して涙を流すという、同一の展開を見せている。それは、まさに『源氏物語』の本文【4】と一致しているのである。

このように、平中説話（本院侍従樋洗宮譚）と若菜上巻の当該場面とは、女に拒絶された男が泣くという点において共通しており、しかもそこに至るいきさつにもいくつか類似点を見出すことができるが、特に『今昔物語集』の本文とは酷似している。

まず『今昔』の【5】では、①以前から取り次ぎをしていた女童が、内側から掛け金はずしてくれることにより、平中は侍従の居所に入ることになっている。平中はどうとう彼女を捕まえたと安心するが、侍従は障子の掛け金をかけるべきだと口実を作り、逃げ出してしまう。②平中はその障子に掛け金が懸けられていることに気づき、③すごく悔しく思い、④呆然として障子のわきに立って泣くのである。

また、若菜上巻【4】においても、(b) 源氏は中納言の君という女房により、朧月夜のいる居所の前の廂に入れられる。(c) 源氏は彼女に近づいたことに満足するが、以後(e) 朧月夜との間にある障子に掛け金が懸けられていることに気づく。(f) 源氏は朧月夜に恨み言を言い、(g) 平中のまねではないけれど、涙を流すのである。

『今昔物語集』では、②のように「障子ノ懸金」というのが明記されているが、『源氏物語』では傍線部(e)「御障子のしりは固めたれば」となっており、「掛け金」のことは書かれていない。しかし、傍線部(e)のところは『新全集』頭注が「『しりさし(尻錠)』は戸や襖の下部だけを掛け金でとめること」と指摘し、『玉上評釈』が「くさびをかませる。今ふうに言えば錠がかけてある」と説明しているように、源氏と朧月夜を隔てている襖障子にも「掛け金」がかけられていたと見るべきであろう。

このように、この【4】(g)の部分は、平中墨黒滑稽譚に依拠し、女の歡心を買うため空泣きをして失敗した事実を下敷としたものとして理解されてきたが、ここで検討したように、むしろ『今昔物語集』の【5】の話と同一の展開を見せており、本院侍従樋洗宮譚と近い設定と言える。

この平中墨黒滑稽譚と本院侍従樋洗宮譚は、貞文死後50年から100年の間に発生し、成長したとされている。即ち、平中墨黒滑稽譚が『源氏物語』以前に完成していたと同様、この本院侍従樋洗宮譚も『源氏物語』以前半世紀ほどの間に既に好色滑稽譚として発足していたのであろうと推測されているのである。とすると、『源氏物語』の製作当時存在していた本院侍従樋洗宮譚が、若菜上巻の当該場面の下敷として用いられる可能性は充分推察できるように思われる。

『今昔物語集』の【5】の話のほうが、若菜上巻の【4】の本文とこれほど密着していることは、実は『源氏物語』の影響によって後世の人が手を加えたからではなからうか。当時それほど繋がっている話として、両者は認識されていたのであろう。

4. 若菜上巻における平中引用の意味

では、源氏と朧月夜との再会の場面に、どうして源氏は平中の姿と重ねられていくのだろうか、その物語の意味を探ってみたい。

この再会の場面で、源氏は、平中と引き合いに出されてやや戯画的に扱われていた。もちろん若菜上巻では、本院侍従樋洗宮譚のように男が女に拒絶されるところで話が終わるのではなく、結局源氏は朧月夜の部屋に入っていくことになっており、朧月夜が源氏を受け入れることまで描いている。最初引用する際にも「平中がまねならねど（平中のまねではないが）」というように、源氏の姿は平中と距離を置いていた。このように、この場面は、源氏の行動に平中の姿を重ねて戯曲化していながらも、単にこの平中説話を好色滑稽譚として用いるのではなく、平中説話とは逆のことを描き出すことによって、平中とは異なる、源氏の男としての吸引力を物語るのにも利用するといえよう。

しかし、再会の場面で、源氏が滑稽的な平中の姿とは異なる相貌をも提示されていたとしても、物語が源氏を平中と重ねていくことによって戯画的に描き出していることは、否定できないのであろう。末摘花巻の場合、源氏が自分の鼻に紅を塗って、会話を通してみずから自分を戯曲化していたことに比べると、若菜上巻では「平中がまねならねど、まことに涙もろになむ」（八一頁）という草子文の形で平中のことと重られており、物語が源氏を戯曲化しているのである。それは、末摘花をめぐる源氏の滑稽的な失敗の話が主な内容であった末摘花巻と異なって、若菜上巻が源氏においても物語においても重みのある内容が

書き綴られている巻であることを考えると、物語がこの場面で源氏を戯曲的に描き出そうとしていることが、より明確に浮かび上がってくるのである。

さらに、源氏はこの場面のみならず、清水好子氏の指摘通り¹⁸⁾、再会の導入部から色好みの人間として物語に紹介され、彼女と会う前にややはしゃぎ過ぎる様子として描かれていた。また、「後を固めた障子をがたがたと『引き動かしたまふ』と、こんな描写は今までの光源氏には書かれなかった」¹⁹⁾ものであり、物語は『源氏物語』一部で絶対的な存在とされてきた源氏を、この場面で劇画化した人物として相対的に描き出しているのである。

実は、このような物語の描き方は、若菜上巻における源氏の位相を反映したものと言えるのではなかろうか。それは、「女三宮降嫁決定までの朱雀院の役割はきわめて大きく、一方源氏は求婚者の中に割り込むことによってその地位が相対的に下落している」²⁰⁾という、石津はるみ氏の指摘のように、この若菜上巻における源氏の位置づけと重なりをもつものと言えよう。

5. 結をかえて―朧月夜再登場の意味

では、最後に若菜上巻におけるこの短い挿話がいかなる位置を占めており、物語の中で源氏の姿に再び平中の面影を重ねていく意味をも併せて考えてみたい。若菜上巻における平中の引用の意味は、この再会場面の記事が物語の中でいかなる位置にあるのかを追求することによってより明確に浮かんでくると思われる。

『源氏物語』の一部では、源氏が准太上天皇という潜在的な王権を手に入れる過程を描き、藤裏葉巻に至って楽観的完結で括られる。その後、若菜上巻に入っては今までとは異質的な物語世界が描き始められていくのである。若菜上巻では、源氏の四十の賀、明石の女御腹の皇子の出産と産養など、源氏の栄華を象徴する晴儀が繰り広げられている反面、女三宮の降嫁により、今まで築かれてきた六条院の安定が揺すぶられはじめる巻でもある。このように、源氏の栄華とその背後の暗部を同時に照明を当てているところで、朧月夜との再会のことが描かれているのである。

従来、この若菜上巻における朧月夜との再会の記事や朧月夜の再登場については、様々な角度でその意味づけがなされてきた。

秋山虔氏は、若菜上巻の方法を問う一連の論考で、この再会の物語には「主情的世界への耽溺」があるのみで、光源氏一紫上一女三宮の世界のような人間相互の葛藤が

18) 清水好子 (2000・12) 「『朧月夜再会』 『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 3 若菜上 (前半) 」至文堂、pp.258-69.

19) 清水好子、注 (15) 前掲論文、pp.258-69.

20) 石津はるみ、注 (14) 前掲論文、pp.41-56.

なく、また発展的契機も消失していると指摘する21)。増田勝実氏は、「朱雀院の寵愛した尚侍との情交の復活を描いて、源氏が三の宮の罪を弾劾して石をなげうつことができないようにしている」と指摘し、この逸話の性格を、次の女三宮と柏木の密通と関わらせて規定する。また、松田成穂氏の場合、この再会の物語は俗世の日常生活の論理から脱却した浪漫性に基調をなした世界であり、「六条院をめぐる生活から飛躍遊離することによって、人生の積極的契機をつかみ直す必要が要請」されたと指摘する22)。

このように若菜上巻の世界の中でこの場面を把握しようとする諸論のなか、特にここでは、朧月夜の再登場の理由について言及した石津はるみ氏の論に注目したい。石津氏は、物語において源氏の日常からの逃避の相手として朧月夜が選ばれたのは、源氏と朱雀院、かつて二人の間に挟まれ独自の過去を経た女君であり、ここで同じ二人の人物と関わっているだけに、朱雀源氏両者の対照的な姿を描き出す恰好の媒介者であったと説明する23)。

朧月夜は源氏と政敵というべき右大臣の娘であり、朱雀帝の后として入内が予定されていたが、花宴巻に弘微殿の細殿で源氏と契を結び、以後尚侍として入内した後も源氏と密会を重ねていくことによって源氏の須磨退去の原因となった女君である。このように、源氏との間に「独自の過去」をもつ朧月夜の登場により、源氏と朧月夜が共有する「過去」というのが、この再会の場面に繰り返して語られていくのである

【8】六条の大殿は、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年ごろもわすれがたく、いかならむをりに対面あらむ、いま一たびあひ見て、①その世のことも聞こえまほしくのみ思しわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、②いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつつみ過ぐしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらんころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきこととは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。(若菜上巻七七頁)

【9】……③いにしへを思し出づるも、誰により多うはさるいみじきこともありし世の騒ぎぞはと思ひ出でたまふに、げにいま一たびの対面はありもすべかりけりと思し弱るも、もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ごろはさまざまに世の中を思ひ知り、来し方をくやく、公私

21)また、秋山虔氏は「光源氏対朧月夜の物語は、たしかに光源氏一紫上一女三宮の世界からは自由であるにかかわらず」、「後者の世界の内実をさらに示現せしめる役割をはたしている」と述べている。(1960・7)「若菜上巻の一問題—源氏物語の方法に関する断章—」『日本文学』、pp.451-460。(1970.5)「外的時間と内的時間」『国文学』pp.89-100。

22)松田成穂(1967・12)「若菜上巻に関する覚え書—朧月夜尚侍の叙述に触れて—」『平安文学研究』、pp.62-69。

23)石津はるみ(1974・11)「若菜への出発—源氏物語の転換点—」『国語と国文学』、pp.41-56。

のことにふれつつ、数もなく思しあつめて、いといたく過ぐしたまひにたれど、④昔おぼえたる御対面に、その世のことも遠からぬ心地して、え心強くもてなしたまはず。(同巻八一～八二頁)

【10】御宮仕にも限りありて、際ことに離れたまふこともなかりしを、故宮のよろづに心を尽したまひ、⑤よからぬ世の騒ぎに、軽々しき御名さへ響きてやみにしよ、など思ひ出でらる。(同巻八三頁)

本文【8】は源氏が朧月夜を訪問する前、彼女を思い出す場面であり、本文【9】【10】は、その再会の場面の一部分である。

ここで言う【8】の傍線部①「その世のこと」とは、花宴での二人の密会、【9】の傍線部④は、昔二条邸で源氏と密会を重ねていたことをさしている。【8】の傍線部②「いとほしげなりし世の騒ぎ」と【9】の傍線部③「いみじきこともありし世の騒ぎ」とは、須磨退去の事件をさすもので、前者は源氏が、後者は朧月夜がその須磨退去という大騒ぎのことを想起している場面である。また【10】の傍線部⑤の「よからぬ世の騒ぎ」とは、源氏の須磨流離の原因となった密通露見のことをさし、そのせいで世間に噂がひろまり、二人の仲がそれきりになってしまったと朧月夜の女房、中納言の君の心に則して叙述している。

このように、朧月夜との再会によって、二人の間に共有する想念、〈過去の密会〉と〈須磨流離〉の記憶というのが、長い時間を経て若菜上巻に物語の中で甦ってくるのである。

源氏において須磨の流離というのは、藤壺との密通による罪の意識に囲まれた失意の記憶であると同時に、将来中宮となる明石姫君を得るといふ栄華を支えていく過程とも言えるものであった。ここでは、その須磨流離の原因となった朧月夜を再び物語の中に登場させ、源氏との逢瀬を描くことによって、栄華の最中に須磨流離の意味を問うているのではないだろうか。

さらに、この再会の場面の文脈をより詳細に読んでいくと、ここでは、単に平中と源氏という個人のレベールではなく、より複数の人物が関わった構図が内在していることに気づかれる。

【11】①六条の大殿は、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年ごろもわすれがたく、いかならむをりに対面あらむ、いま一たびあひ見て、その世のことも聞こえまほしくのみ思しわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつつみ過ぐしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、②世の中を思ひしづまりたまふらんころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきことは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。(若菜上巻七七頁)

引用本文【11】は、朱雀院の出家のことが物語の中で片付けられた後、朧月夜に話題を移してこの再会を描き出す導入部である。ここで、傍線部①のように、源氏は色好みの男として朧月夜を想うことが語られ、傍線部②のように、逢ってはいけないとわかっていながら、想い絶つことができず、しきりに手紙をよこすことになっている。それは、『今昔物語集』「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」の導入部と類似するものである。

【12】『今昔物語集』 「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」

今昔、兵衛ノ佐平ノ定文ト云フ人有ケリ。字ヲバ平中トナム云ケル。①品モ不賤ズ、形チ有様モ美カリケリ、氣ハヒナニトモ物云ヒモ可咲カリケレバ、其ノ比、此ノ平中ニ勝レタル者世ニ無カリケリ。此ル者ナレバ、人ノ妻、娘何ニ況ヤ、宮仕ヘ人ハ、此ノ平中ニ物不被ヌハ無クゾ有ケル。

而ル間、其ノ時ニ本院ノ大臣ト申ス人御ケリ。其ノ家ニ侍従ノ君ト云若キ女房有ケリ。形有様微妙クテ、心バヘ可咲キ宮仕ヘ人ニテナム有ケル。②平中彼ノ本院ノ大臣ノ御許ニ常ニ行通ケレバ此侍従ガ微妙キ有様ヲ聞テ、年来艶ズ身ニ替テ仮借シケルヲ、侍従消息ノ返事ヲダニ不為ケレバ、平中嘆キ侘テ、消息ヲ書テ遣タリケルニ……（三九三頁）

『今昔物語集』にも平中は①色好みの男として登場し、②本院の侍従を懸想し、彼女に手紙を送っているのである。特に『源氏物語』において、朧月夜が朱雀院の寵愛を受け、たとえ朱雀院が出家をした後だとしても、彼女との恋は「あるまじきこと」と源氏みずから認識しているように、『今昔物語集』にも本院の侍従は本院の大臣の女として、平中には禁忌の対象として設定されているのである。

このように、この両話は、源氏—朧月夜—朱雀院、平中—本院の侍従—本院の大臣という、同一した三角の人物構図として構成されているのである。もちろん、これは『今昔物語集』の本文に依拠したものであり、『源氏物語』が書かれる当時、この平中説話（本院侍従樋洗宮譚）が本院の侍従を女主人公とし、このような人物構図が確立していたか、明らかではない。ただ本稿で言えるのは、源氏の〈須磨流離〉の記憶が物語の中で思い起こされるこの再会の場面で、物語は平中説話（本院侍従樋洗宮譚）を引き合いに出して源氏と朧月夜の逢瀬を描いており、そのような当該場面の平中引用は、若菜上巻における源氏の位相と物語展開と密接に関わっているという点である。

以上のように、この再会の場面は、単なる源氏の日常からの逸脱の記述ではなく、若菜上巻という二部の出発に当たって、物語の中で須磨流離や源氏の栄華の真意などを整理しようとする物語の要請により設けられた場面と理解すべきであろう。

【参考文献】

<テキスト>

- 浅見和彦 校注・訳(1997) 『新編日本古典文学全集 十訓抄』小学館
阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注 (1994~1998) 『新編日本古典文学全集 源氏物語』小学館。以下、『源氏物語』の本文引用は、本書による。
小林保治・増古和子校注・訳(1996) 『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館
稿保己一 (1924・8) 『続群書類従』第三十二輯下, 続群書類従完成会, (巻第九百五十一、世継物語)
玉上琢弥編(1968) 『紫明抄 河海抄』角川書店
三木紀人外三人校注 (1990) 『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語・古本説話集』岩波書店
森正人校注 (1996) 『新日本古典文学大系 今昔物語集五』岩波書店
吉田幸一 (1983) 『本朝語園』古典文庫

<関連論文・書>

- 秋山虔 (1960・7) 「若菜上巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章―」『日本文学』、pp.451-460.
―― (1970.5) 「外的時間と内的時間」『国文学』 pp.89-100.
石津はるみ (1974・11) 「若菜への出発―源氏物語の転換点―」『国語と国文学』、pp.41-56.
稲賀敬二 (1975・12) 「悪女の条件―本院侍従―」『国文学』、pp.62-69.
清水好子 (2000・12) 「『朧月夜再会』『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 3 若菜上 (前半)」至文堂、pp.258-69.
鈴木宏昌 (2002・1) 「源氏物語と平中説話―末摘花巻の構想と主題―」『帝京大学文学部紀要 日本アジア言語文化』、pp.87-112
―― (1984) 「末摘花巻における光源氏像の形成―『みつ』問答との関連を軸に―」『文学・語学』、pp.88-97.
坂本昇 (1981) 「朧月夜と源氏」『源氏物語構想論』明治書院、pp.320-399.
萩谷朴 (1959) 『平中全講』同朋社、pp.244-250.
増田繁夫 (1980・3) 「朧月夜と二条后」『大阪市立大学 人文研究』、pp.658-677.
守屋省吾 (1970・6) 「『本院侍従』考―説話的一造型人物像として―」『平安文学研究』、pp.181-192.
松田成穂 (1967・12) 「若菜上巻に関する覚え書―朧月夜尚侍の叙述に触れて―」『平安文学研究』、pp.62-69.

要 旨

平安時代、平中に関する説話は、『平中物語』『大和物語』『十訓抄』『世継物語』『宇治拾遺物語』『古本説話集』など数多い作品に収録されており、広く流布していたと推定される。『源氏物語』においても、末摘花巻の源氏と若紫が戯れる場面と若菜上巻の源氏と朧月夜との再会場面に、源氏の行動に平中が引き合いに出されている。

従来このような末摘花巻と若菜上巻における平中引用については、多くの注釈が同一の平中説話（墨黒滑稽譚）を下敷にするものとして把握されてきた。しかし、若菜上巻において平中が女との関わりの中で涙を流すというのは、この墨黒滑稽譚のみならず、本院侍従樋洗篁譚にも出てくる設定である。とすると、この若菜上巻における平中の話を、墨黒滑稽譚と同一ものと限定せず、より若菜上巻に近い内容を探って検討する必要があるのではなかろうか。

まず本院侍従樋洗篁譚が収録されている『今昔物語集』「卷第三十平定文仮借本院侍従語第一」、『宇治拾遺物語』卷第三「十八平貞文、本院侍従の事」、『世継物語』卷第九百五十一の本文を取り上げ、若菜上巻の当該部分の比較検討してみた。その結果、本院侍従樋洗篁譚と若菜上巻の再会場面は、普通思いをかけていた女性の所に接近した男が、その女性が男の侵入を防御するため施錠した隔て具く『今昔』と『世継』は障子、『宇治』は遣戸の前で自分を拒絶したことに気づき、落胆して涙を流すという、同一の展開を見せており、今まで若菜上巻の下敷として指摘されてきた平中墨黒滑稽譚より、より若菜上巻の当該場面の設定と源氏の心境に近いということが明らかになったと言える。

この本院侍従樋洗篁譚は『源氏物語』以前半世紀ほどの間に既に好色滑稽譚として発足していたであろうと推測されており、『源氏物語』の製作当時存在していた本院侍従樋洗篁譚が、若菜上巻の当該場面の下敷として用いられる可能性は充分あり得ることであろう。

本稿は、若菜上巻の源氏と朧月夜との逢瀬の場面に投影されている平中説話のことに焦点を当てて、今まで指摘してこなかった他の平中説話（本院侍従樋洗篁譚）との影響関係を明らかにし、その挿話が『源氏物語』の中でどのような位置づけにあり、意味を持っているのかを考察してみたものである

キーワード： 源氏物語、平中物語、滑稽譚、物語の引用、再会、若菜上巻

투 고 : 2009. 8. 31
1차 심사 : 2009. 9. 12
2차 심사 : 2009. 9. 26